

それでも、やはり子を生まねばならないのだろ
うか。

いや、いや、子供は天からの授かりもの、ちっ
ぽけな人間の意志で、生む、生まぬを決めるなど、
空恐しくてできることではない。宿った生命は、
大切に育くみ、この世に孤々の声を上げさせるの
が女のつとめであり、人間としては当り前のこ
となのだ、と喜乃は思い返した。

それにしても何と切ない母と子であることか。
最初からわかっているながら、妊娠の意味を深く
考えなかった自分を、喜乃は思いきり罵倒して
やりたかった。

とはいえ、日に日に大きくなる喜乃の腹部を

愛撫しながら、

「丈夫で生まれてこいよ。」

と喜びをかくさない信次を見ると、待ち望まれ
て生まれてくる子の幸せも、また別の意味で考
えてみるのであった。

喜乃の懊悩をよそに、子のいのちは、その身体
の中ですすくすくと育つていった。

十月もおわりに近い頃、信次は喜乃に、女木島
の知人のうちへ移ることを提案した。

「あそこなら空気もええし、静かじや。経験を積
んだ産婆も頼んである。わしのこととは心配せんで
もええ。万難を排して出かけていくようにする
。」

言葉どおり、女木へ移つてからも、驚くほどし
ばしば信次はやってきた。

身ごもつてからの喜乃は、色白の肌がいつそう
透き通るように見え、ものうげな仕草には、触れ
れば崩れるような色香がただよい、胎内で子を育
てている女独特のふしぎな情感が、妖しい美
しさをかもし出していた。

そんな女をわがものとして信次の満ち足
りた思いは、その態度、物腰の一つ一つから押し
はかることができた。

信次は、今、喜乃に対して、その全身でのめり
こんでいるのであった。

思い乱れつつ日を送る喜乃のもとへ、露のくる

ことが知らされたのは、年が明け、小正月も過ぎ
た頃である。
考えあぐねた末のある決意が、喜乃の中でよ
うやく形をととのえたのは、眠ることなく過ぎ
た長い冬の夜が明けようとする、今日の朝まだき
のことであつた。

喜乃は言葉を切つて、深い吐息をついた。

長い話と心の動揺から、疲れを覚えたのか、
喜乃はさつきよりやや青ざめていた。息をつくと

びに細い肩が揺れ、胸もとが大きな波を打った。

障子ががたがたと鳴った。おおてを越えて吹き
つける程、風が強まったのかも知れない。

露は寒さを忘れていた。

喜乃の話は、露を驚かせ、たかぶらせ、そして辱しめ、さらに大きな悲しみを与えるものであった。

途中で話を打ち切らせたい衝動に駆られたが、あえてそれをしなかったのは、喜乃が、嘘もかくしもなく、純粹に思いのたけを吐き出していることがわかったからである。

「ちよつと、わたし、風に吹かれてきます……。」

露は立ち上がった。

喜乃は黙って露の顔を見上げ、静かにうなずいた。

浜に人影はなかった。

はるか彼方から白い波が海岸をめざして、疾駆

してくるのが見える。海岸の突堤にあたると、まっ白な飛沫を宙天高く上げて砕け、一つの波のいのちは終わる。

露は、揚舟にもたれて、波の動きを見ていた。波を駆り立てて沖から吹く風に、露の髪も、袖も、裾も、乱れ放題に乱れた。

いや、外側だけではなかった。

露の内部にも、風が吹き荒れていた。

ごうごうと胸の中に猛る風の音に、露は聞き耳を立てた。

号泣しているような、怒り狂っているような嘲けり笑っているようなその風の音に耳を澄ま

していると、露は、次第に心が荒々しく変貌す

るのを覚えた。

その荒々しさは、すなわち、信次への思いであった。

去年の秋頃から取り戻した、夫婦二人のおだやかな日々。あれは、ちよつど喜乃が子を宿してまもなくの頃であったのだ。……。

信次にとっては、わが子を得た喜びに我を忘れていた時期でもあった……。

(あの頃、わたしに向けられたあの人のいたわりや、やさしさは、包み切れない喜びが少しばかりこぼれ落ちたに過ぎなかったのだ……)

みじめになることがわかっていても、そう思わ

ずにはいられなかった。

露は、あの春雪の夜のすさまじい二人の葛藤を思い起こした。荒れ狂った信次の夜叉のような眼の色がよみがえった。

と同時に、白蠟のような喜乃の肌を、いとおしみに満ちた表情で愛撫する信次の姿が、鮮明に見えた。

それは、露に向かっては一度ものぞかせたことのない信次の、男の顔であった。

風が露をさらって行くところかのように、すさまじい勢いで駆け抜けた。波しぶきが、細かい霧となって露の全身に降りかかった。

よるめきながら、露は突然、風音の中に信次の

声を聞いた。

「石女のくせに……醜女のくせに……、えらそうに……。」

あの夜、浴びせられた恐しい言葉が、風音と共に、すさまじい反響音を立てて耳もとで鳴り響いた。露は眼をかたくつぶり、耳をしつかりと両手で押さえて、揚舟のかげにうずくまった。

「どうや。喜乃は美しいおなごじやろうが。わしの子も生んでくれる。小ざかしいことも言わん。わしだけを頼り切つていいなりになるおなごを、男として捨てられるか……。」

信次の声は両手で押さえた耳の中へ、容赦なくはいりこんできた。

海原に向かつて坐わりこんだ露の顔は、波しぶきと涙でびっしりと濡れていた。

信次と夫婦になつてから六年。その間、信次の眼がまっすぐ露に向けられていたことが果してあつただらうか。

二人の間には絶えず、何かが介在していた。

ある時は、舅が、姑が、そして、長山家の重さが、わが子を欲しがる信次の執念が、その上、今は、こんなにもあからさまに、信次の愛情を傾ける対象が、二人の間に立ちはだかつていない。

信次の中には、いつも露以外のものがあった。もつとも見えるはずの妻が見えていなかった

「おなごは、しおらしいのが一番じゃ。はっはっは……。」

勝ち誇つたような信次の笑い声が、さらに追い討ちをかけた。

「もうやめて！やめて！」

露は声を限りに絶叫した。目を開いて、立ち上がると砂浜を思いきり駆け出した。

砂にめりこんで、草履が脱げ、足袋はだしになった露は、それでも走ることをやめなかった。裾が大きくひる返つて、ふくらはぎがのぞいた。寒風に、肌が紫色に変わっていた。唇も手足も凍て果てて、感触がなくなったとき、露はやつと走るのをやめた。

信次には、もしかしたら、自分自身さえも明確に見えていなかったのではなかったか。

人の痛みをわかうとしない信次に、露はこれまで何度踏みつけられたことだろう。

(いくらばかな女でも、踏まれれば痛いんや！)

露は心で叫び続けた。

冬の海鳴りがひときわ激しくなった。

部屋へ戻つてきた露を見て、喜乃は驚天した。

濡れた髪と衣服、足もとに、はきものはなく、蒼白な顔で小刻みに震えている露の、わずかな刻の間の変わりように、喜乃は、胸をふさがれた。

「喜乃さん……。」

絶句している喜乃の前へ、露は崩れるようにすると、まっすぐにその顔を見すえた。

「わたしは……わたしは……、もし、来世に信次と添わずにすむならば、たとえ…、たとえ、蛇に生まれ変わってもええ…。」

喜乃は身がすくんだ。

何というすさまじい言葉だろう。露の怨念が、紅蓮の炎を噴きながら吐き出されるのを見たと思っただ。

「奥さん…」

喜乃は、露の前に打ち伏した。

「すみません…。すみません…。」

繰り返さずにはいられなかった。

信次の分まで謝まらねばならない。自分にとつ

ての信次は大切な人なのだ。いとしいお腹の子の父親なのだ。しかし……。

喜乃は顔を上げて、露を見た。

「この子を、長山家へ引きとつてもらおうやなんて、そんなおこがましいこと、わたしは思うてはおりません。

何としてでも、わたしが一人で育てます。旦那さんとも、もうお会いしません。それを、せめてもの償いの気持ちとお取り下さって、許して頂ければ…。」

語尾は、消え入るように小さくなった。

昨夜までに何度も反芻してようやく到達した

喜乃の、苦しい結論であった。

露は、黙って聞いていた。

敗北感がじわじわと、冷え切った身体を浸し始めていた。

懸命に心情を訴え続けている喜乃の、かつきりと見開いた瞳には、凄艶な美しさが宿っていた。

(以上3月24日放送分)